

人類学教育とアクティブ・ラーニング

著者	Occhi Debra J., Davis Scott, Vail Peter
雑誌名	比較文化
巻	8
ページ	130-134
発行年	2002
URL	http://id.nii.ac.jp/1106/00000695/

人類学教育とアクティブ・ラーニング

Debra Occhi, Scott Davis, and Peter Vail

宮崎国際大学

宮崎国際大学では、環境問題や国際平和への意識、問題意識を備えた思考力を養うことを目的として、日本の優れた若者に英語及び比較文化の教育を行っている。私達、三人の人類学教員は、単に日本文化を再解釈するだけではなく、異文化に通じた人材の育成に努めている。科学は、既存知識の集大成にとどまらず、様々な変化を流動的に対応し、生活に常に関わり続けるものである。特に、人類学が生きた学問であることは、今さら言うまでもないだろう。文化との関係を密にしてこそ、この学問が成り立っているのであるから。また、言語侵略主義に与するわけではないが、今や国際的に広く用いられている英語の能力を高めることも、人類学教育の重要な目的である。そもそも、人類学と言語教育には重なる部分が多い。この点から見ても、宮崎国際大学の教育理念と人類学という豊かな学問には、共通するものがある。

日本に於いて日本人に日本文化を教えるには、まず日本と西洋社会の関係 (cf. Wallerstein の世界システム論)、そしてアジアと日本の関係を、様々な角度から見ることが何より大切である。「日本文化とはかくかくのものである」とか「文化を理解するにはこの見方で」といったことを教えるのが、人類学教育の目的ではない。文化を理解する過程や方法を、学生が自ら習得、体験するようにもっていくことが、一番の目標である。いわゆるアクティブ・ラーニングという教育理論だ。英語で授業を行う際、どの概念をどのような言葉選びで教えるかに、教員は注意を払わねばならない。様々な社会に於ける発展の過程や状況を、英語で分析していくうちに、学生は異文化に対する理解を徐々に深めていくことになる。

また、日本文化及び比較文化を種々の角度から捉える機会を数多く与えることで、学生達にアジアの中に於ける日本を再認識させることができる。中国及び東南アジアとの関係は、特に重要である。さらに、2年次後期には英語圏の大学での海外研修があり、学生は異文化に直接触れて文化の違いを実感する。この異文化体験を踏まえて日本文化研究をさらに重ねることで、学生は新たな角度から日常生活を見つめ直し、そこに学術的価値を発見できるようになる。

本稿3名の著者の内、Peter Vail は現在アメリカ合衆国 George Town University で教鞭を執っている。本稿は平成14年6月1日金沢大学で行われた第36回日本民族学会研究大会の分科会「教室の中の人類学：異文化としての日本で人類学を考える」において発表した際原稿に手を入れたものである。本稿の日本語作成にあたっては服部ゆきこ氏から様々なアドバイスを頂きました。

私達は、宮崎国際大学で、英語で人類学を教えている。授業ではよく、日本文化を扱う。こうしたユニークな教育環境で、どのように日本で日本の人類学を教えているのか、これからお話ししたい。

宮崎国際大学の構造そのものが、人類学教育に向いているといえる。ここでは、英語を学ぶ授業ではなく、英語で学ぶ授業を行っている。宮崎国際大学は比較文化学を教える単科大学で、社会科学系だけでなく人文科学系も含む、西洋のリベラルアーツ的なカリキュラムで、地域研究や環境問題まで幅広く教えている。これは、人類学教育に非常に適した構造と言える。つまり、人類学が、宮崎国際大学の教育の大きな柱の一つとなっていると私達は考えている。

宮崎国際大学の教員の8割は外国人で、学生とは常に英語で接している。学生は、入学するまで概して受け身の授業に馴染んできたようだが、宮崎国際大学では授業にもコミュニケーションを重視する英語圏社会のスタイルを採り入れている。

学生は、これまでの生活で身につけた日本文化を知の基盤として、授業に臨み、社会科学的な思考法を学ぶ。授業は講義中心ではなく、アクティブ・ラーニングという相互参加の形で進める。学生は、情報をあらゆる角度から自分なりに分析して、結論を出し、それを英語で発表する。

2年次の後期に、全学生が16週間の海外研修を体験する。これはフィールドワークと似ている。1年半、英語及び相手国の文化を学習した上で、海外に行き、そこで自分の選んだテーマについて研究するのである。帰国後、それぞれの体験を基に、異文化に関するレポートを仕上げる。

こうして得た貴重な海外体験は、その後の学習に於いていろいろな形で活かすことができる。例えば最近、私の受け持つ民族学の授業で、アメリカの北アイオワ大学で日本文化を学ぶ学生達と一ヶ月間Eメールを交換するというプロジェクトに参加した。このプロジェクトで、日本文化について答えるだけでなく、自分達の海外体験をも活かすことができた。アイオワ州の学生の日本文化についての知識は、民族学のテキストから得たものが全てであった。彼らからの質問に対処する中で、学生はこうしたテキストの不完全さや、またフィールドワークの対話的な要素についても理解を深めていった。アイオワ州の学生にとっても、非常に有益な体験だったようである。これは、ほんの一例であるが、こうした人類学的な体験が、授業に盛り込まれているのである。

日本で、少なくとも宮崎国際大学で、日本文化を教えるにはどうすればいいか。この問題を、英語の中でどういう英語を教える必要があるかという問題に置き換えて考えてみたい。宮崎国際大学で教えているのは、日本人ではなく、英語圏の国その他から来た教員である。社会科学は西洋で発展したで、現在は世界的な学問になっているにもかかわらず、伝統的に西洋社会の考え方が色濃く反映されているといえる。

宮崎国際大学の人類学や他の授業の中で英語を教える必要性によって、私達の立場も決まってくる。つまり、日本文化をいかに教えるかという問題は、学生にいかん英語で社会科学について論じさせるかという問題につながってくるわけである。彼らを英語中心の授業に参加させることで、「文化」という概念を理解させることが出来るのである。もちろん、人類学を教えるためには、英語が不可欠という意味ではない。ただ、宮崎国際大学で日本文化を教えるという状況に於いて、学生を対話重視の授業に参加させる方法を考えると、必然的に英語教育が重要になって来るわけである。

とはいえ、実際には、こうした授業を進めるのは、容易ではない。学生も教員も、忍耐と努力を強いられる。英語の、しかも対話中心の授業に慣れるまで、学生は大変な苦勞をする。しかし、「困難が精神を鍛える」のだから、私達教員は、それを励みにしている。

社会科学を学ぶ際、思考や発言の道具として英語を使うことで、学生は慣れ親しんだ自国の文化を、距離を置いて客観的に見つめるようになる。そこから、日本文化についての真の理解が始まる。このように、学生にはなじみの薄い対話重視の授業を、しかも英語で受けさせ、それを通して、日本の、或いは東アジアの身近な文化を冷静に分析させることが、私達の大学で行っている人類学の教育法なのである。

例えば、学生はアルバイトの体験談を交換し合い、そうして得た情報をもとに、マルクス主義の「搾取」という観念を理解していく。また、自分達の家系図から、「血族」の観念や、時代による文化の移り変わりに目を向け、論議を発展させていく。

宮崎国際大学のこうした教育のあり方を、例文で示したい。

日常活動の説明フィールドワークのシミュレーション

What does your family do at the but Sudan every day?

あなたの家族は、毎日仏壇の前で、どんなことをしていますか。

文化の構造を分類する

What colors, clothing, places, and foods are considered *iwai*?

どんな色、衣服、場所、食べ物が「祝いごと」にふさわしいと考えられていますか。

概念化或は概念の説明

Describe how X is created by Y, how X is related to Y, etc.

YからXは、どのように生まれましたか。Xは、どのようにYにつながっていますか。

伝統文化と現在文化の変化

How and when did your grandparents marry? Your parents?

あなたの祖父母は、いつ、どのように結婚しましたか。両親は、どうですか。

歴史と現在の比較

What parts of *tanabata* derive from China? What parts were added in Japan?

七夕の行事で、中国から伝わった部分はどこですか。日本で付け加えられた部分は何ですか。

翻訳と各言語の特徴

What does X mean in English? What part of the meaning is added/omitted in translation?

Xは、英語でどういう意味になりますか。日本語から英語に訳する際、原語の意味に付け加えられた、あるいは削られた箇所はどこですか。

感想

What images do foreigners have of Japan? What is the student's stance about these?

外国人は、日本に対してどんなイメージを持っているのでしょうか。それに対して、学生としてどう思いますか。

研究成果を自由に発表できるほどの英語力を身につけるには、基本構文の練習が欠かせない。今まで話した例は全て、こうした練習を土台とした授業の中に、うまく取り入れられている。基本構文を着実に自分のものにし、状況に応じて、ふさわしい構文を選んで使えるようにするのは難しい作業だが、大学の4年間をフルに活用して、取り組んでいる。

学習の道具としての英語なので、もちろん、標準的な社会科学の目標を念頭に置き、それに沿って授業している。合法性とか、官僚制度、合理化といった国政に関する単元は、おろそかにできない。また、比較や比喩の用語などの言語学的な学習だけでなく、広告やポップ・カルチャー等の社会現象を扱うには、基礎的な記号学の概念を教えることで、非常に役に立つ。いろいろなレベルの「交換」に関する概念を教えることで、社会構造や社会の流れを分析し、言語の用法や相互作用の研究とうまくかみ合わせることが出来る。また、これを土台に、贈答とか、本音と建て前の文化、管理社会といった、日本の多様な慣習、文化に、目を向けさせることも出来る。

こうしたことから、日本で日本の文化を教えることは、文化の理解を深める学習に必要な、基本的な英語は何かを考え、それを系統立てて教えることにつながるのである。

宮崎国際大学では、タイ（ヴェイル）、日本（オチ）、中国（デイヴィス）に焦点を当て、東南アジア及び東アジアの生活に関する私達教員の知識を基にして、社会科学を教えている。単なる教育のための教育ではなく、理論面もおさえた教育を目指している。

東アジアでは、明治時代に西洋から翻訳されて入ってきた19世紀の社会科学が、いまだに幅を利かせている。授業を通じて、学生に、こうしたことに改めて目を向

けさせたい。「宗教」「哲学」「文学」「人類学」等が、ある意味で、思想の化石とも言えることを、ぜひ学生に伝えなくてはならない。文化を分析していくうちに、こうしたものは、ただの基礎概念であることが分かってくるはずである。

Wallerstein の鋭い、率直な社会科学批評を読むと、経済学、政治学、社会学、人類学等、私達が受け継いできた社会科学は、19世紀に偶然生まれた学問で、もはや役に立たなくなっていることが分かる。私達は、過去の人類学が持つ負の側面を反復することのない環境でこそ、この学問に必要な批判的な見方が養われるのだという信念で、学生の教育に打ち込んでいる。

学生に英語を使わせている宮崎国際大学の教え方は、表面的には文化や言語学上の植民地主義と映るかも知れない。しかし実際は、その逆なのである。確かに、文化の相互関係とは、両者が互いに文化をやり取りすることである。しかし、人類学は決して、単一の学問ではなく、いくつものバージョンがあるということを踏まえて、授業したいということを強調したい。たとえば現在東アジアに見られる習慣や、何千年も前からあった習慣を系統立てるためには、ただ与えられ知識を複写するのではなく、積極的に自ら実例を見つけ、討議に参加して互いに学んでいく姿勢が何より大切なのである。

このように、学生には、先達の業績に敬意を払いながらも、自由な心で身近な文化を捉え直し、自分達の人類学を開いていって欲しい。この様に思いながら私達は教育に当たっている。